

## 6. 仏教伝来と瓦

6世紀なかば、仏教が朝鮮半島から伝わり、その後、聖徳太子がいた6世紀末から7世紀前半になると、寺院が各地に建てられるようになりました。寺院の建物には今まで、わが国になかった瓦が葺かれ、建物の軒先は、文様のついた軒丸瓦・軒平瓦で飾られました。軒丸瓦は蓮（はす）の花を真上からみた文様で、蓮華文（れんげもん）と呼びます。この文様は時代によって変化がみられ、花びらの中に何もなければ、葉脈（はみゃく）の稜線（りょうせん）やくぼみが表現されている素弁蓮華文が一番古く、続いて、花びらの中に子葉（しょう）1個を配置した単弁蓮華文、続いて、花びらの中に子葉2個を配置した複弁蓮華文の順におおよそ変化していきます。

7世紀の寺院は、各地の氏族が競いあって建てたようです。当時の政治の中心であった大和には、多くの寺院が建てられましたが、近つ飛鳥博物館のある河内にも大和と劣らない数の寺院が建てられました。

8世紀、奈良時代になると、仏教の力を使って、国を治める政策を推し進めようと、都には東大寺が、国ごとには国分寺が建設されました。

左手にある模型は、聖徳太子が建てたと伝えられ、今も大阪市にある四天王寺です。中門・塔・金堂・講堂が一直線に並び、古代寺院の伽藍（がらん）配置の中では古いタイプにあたります。